

WSJ 気候変動でワイン作り変化 6品種追加 ボルドーの苦心

ボルドー地方では気温上昇に対応するため、ブドウの品種を変え、農園に多くの樹木を植えている

【ボルドー（フランス）】ワイン用ブドウ園「リベルパテル」に隣接する森林で、いつものように乾燥した夏のある日に山火事が発生した。ワイン生産者の口ワ・パスケさんは、炎が上がり、自身が育てる貴重なブドウの木々に向かって広がるのを目にした。このブドウ園では、一本3万ドル（約43.5万円）もの値が付くボルドーワインを生産している。

ワイン用のブドウは気候の変化に極めて敏感だ。太陽の光はブドウを温めて熟させる。すると糖分が生まれ、それがアルコールに変わる。光が多

避難する数時間前、パスケさんとスタッフは、火が回らないようにブドウ園周辺の草地をつぶし、火の通り道をふさぐために溝を掘った。また、ブドウ園の池からくんだ水を周辺の木々に散布した。ブドウ園は救われた。

ボルドー地方周辺のブドウ園では今年、水を引くことが許可された。通常は禁止されている行為だ。ぶどう酒の名称を管理するフランスの組織は最近、ボルドーワインの生産に使うことが認められるブドウの品種として六つを追加することを承認した。新たに追加されたのは、赤ワイン用の4品種——アリナルノア、カステ、マルスラントウリガ・ナシオナルと、白ワイン用の2品種——アルバリーニョとリオリラだ。これらはすべて、より暖かく、より乾燥した気象条件で生育する能力があるとして選ばれた。

こうした緊急措置は、世界最高級のワインの産地で、最も急激な部類の気温上昇に見舞われている生産者が、生き残りのために講じる対策のほんの一部にすぎない。多くの生産者は、ブドウが従来熟していた時期の数週間前に収穫を行っている。より涼しい気候の土地に投資している生産者もある。ワイン産地自体の景観を変えるような動きもある。保水性を高め、豪雨後の土地の侵食や流出を減らすため、農園により多くの樹木を植えているのだ。

「正気とは思えなかった」。ワイン専門誌デキャンターでボルドー地方を担当しているワイン専門家ジョージ・ヒンドル氏はこう話す。この決断が伝統的なクラレット（ボルドー産赤ワイン）の特徴を変えるかどうかは誰にも分からない。

国連の気候変動に関する専門家は今年2月、フランス南部を含む地中海地域の地表温度が産業革命以前から既に1.5度上がっていると報告書を公表した。この上昇幅は地球全体の平均1.1度を上回っており、同地域は熱波や干ばつ、その他の異常気象に見舞われるリスクがより高いとされた。

ワインの専門家らは、最良のワインが作られるのは、ブドウが作物として成長できる北限の地域だと述べる。そのような地域だと、ブドウに成熟する時間が与えられ、複雑な風味が生まれるのだという。握りの小規模農家は、フランスの大西洋岸沿いのブルターニュやノルマンディーなど、かつては風が強くブドウ栽培に向かないと考えられていた地域の土地への投資を始めている。しかし、著名なワイン醸造所によると、生産地を別の地



農園の土壌に水分を加えるシャトー・シュバル・ブランの人工池
PHOTO: MARKEL REDONDO FOR THE WALL STREET JOURNAL

域に移すことには問題があるという。規制により、農家はワインの原産地をボトルに表示する必要がある。つまり、真のボルドーワインは、フランス南西部ジロンド河口域に流れ込む川の周辺という特定の土壌以外では生産できないということだ。

冒頭のパスケさんは「われわれはこ

を設置し、停滞した空気を散らすためにヘリコプターを利用した。その後、夏には干ばつが到来、フランス国内の河川が枯渇する中、同国の大半の地域は給水制限の実施を余儀なくされた。

ワイン生産者組合によると、ブドウの収穫は現在、30年前に比べ平均で最大3週間ほど早く行われている。高い評価を得ているラングドック・ルシヨン地域圏のワイン生産者は今年、7月末に収穫を開始。コルシカ島の一部では8月初旬に収穫が始まった。いずれも例年より数週間早い。

「われわれは収穫を8月に開始した。そんなことはかつて一度もなかった」と、ボルドー地方の生産者シャトー・シュバル・ブランの技術責任者ピエール・オリビエ・エクルさんは語った。

シュバル・ブランはアグロフォレストリー（混農林業）に移行することで事態に対応している。ブドウの木の間は何百本もの木を植えるという、歴史の教科書から学んだ技術である。クルエさんは、植えた木々は日陰を作り、土壌の品質を向上させ、ブドウの木がより多くの水分を吸い上げるのを可能にする」と話した。現在は羊の群れがブドウの木の間を動き回ることと土壌に肥沃（ひよく）にしており、敷地内の新たな人工池が土壌に水分をもたらしている。

イゼール地方のワイン生産者ニコラ・ゴナンさんは、農園のブドウの樹種のうち、植えてから何十年もたつピノ・ノワールとシャルドネを引き抜き、地元品種に植え替えたという。この決断は今年成果を上げた。育てる品種を増やす方がいい」と言う。「品種ごとに異なる性質があるため、ある年に一つの品種の状態が悪くても、他の品種の生育が良い可能性がある」

ここで高級ワインを造ることについて話し合っている。世界中のどこでもワインを造ることは可能だが、数多くの正確で詳細な要素が高級ワイン造りにつながると述べた。

一部地域では今年3月、異例の温暖気象によりブドウの木が通常よりも早くに新芽をつけ出し、4月の遅霜の到来に際して脆弱（ぜいじやく）な状態となっていた。生産者は木を温めるためブドウ園全体に大量のろうそく

対応策の多くは、まだ実験段階だ。一部農家は、ブドウの木の密集度を下げ水の必要量を少なくしている。他の農家は、冬季に雨水をためてかんがいシステムを強化している。ブドウの木を植える角度を変えることで、強すぎる日差しの影響を緩和できると言う人もいる。多くの農家は、水不足への抵抗力がより強く、実の成熟期を遅くできる品種を植え付けている。

今より気温が低かった時代には、実が日光に当たる時間を最大化し、アルコール度数を上げるために、農家がブドウの木の葉を刈り取ることもよくあった。現在では、実を日差しから守り、酸味を残すためのより好ましい策として、茂った葉をそのまま残すようになっている。ある農家は、アルコール度数が高くなりすぎないよう、アルコール分を減らす機械を導入したという。

仏北部シャンパーニュ地方などの一部のワイン生産者は、今年の作柄は極めて良好だと述べている。若い木の状況は良くなかったが、年数を経て根が長くなっている木の作柄は良かったという。こうした古い木からとれる、粒が小さいブドウは皮が厚く、それがワインの香りと色合いを良くし、うどん粉病などの病害を防ぐ役目も果たす。

シャンパーニュ地方のワイン生産者団体CIVCのブリジット・バトネ氏は「温暖化の影響を感じているが、今のところまだ悪い影響とはなっていない」と語った。（2022年9月27日付）